

宮島の石垣

石垣といえば、「城」を連想しますが、宮島にも多くの石垣があります。石で造られた狛犬や燈籠のようには目立ちませんが、石垣もまた宮島の歴史を語る証人です。

たとえば、吉川広家自筆書状（『吉川家文書別集』674号）に、「巖島石垣」工事のため「石つき之もの共」と呼ばれる石垣築造の職人集団を動員する、と記されています。書状の年代は特定できませんが、書状の中で広島城下の「堀河」（平田屋川のこと。現在の並木通り・地蔵通りに相当します）の工事がほぼ終わった、としていますから、文禄年間から慶長年間初め（1590年代）のことと思われる。

このとき築かれた石垣は、現在でも残っています。木村信幸氏（広島県教育委員会文化財課）によると、巖島神社の北東側にある石垣がそれに相当します。客神社から本社に向かう途中、東廻廊から見える石垣です。大きな立石を適当な間隔を空けて配置するという築造の仕方が、山県郡北広島町に点在する吉川氏関係の館跡や寺院跡の石垣と同じ特徴を示しているからです。

また、吉川氏配下の職人集団による築造とは特定できませんが、ほぼ同じ時期の石垣と思われるのが、千畳閣の下（北側）の石垣です。御笠浜の石大鳥居と公衆トイレの間の山側に見える石垣です。この石垣は、毛利輝元時代の広島城の石垣と同じ積み方です（たとえば天守閣を支える天守台の石垣など）。

ただし築造当時の石垣がそのまま残っているのは、長さ約30メートル程で、それ以外は後世に築かれたものです。どこからどこまでが毛利氏時代の石垣か、識別してみてください。

（秋山 伸隆）

（「宮島学センター通信」第2号・2011年3月）

